

第 34 期新潟市社会教育委員会議 会議概要

教育委員と社会教育委員との懇談会	
開催日時	令和 4 年 3 月 11 日（金） 午後 2 時 00 分～午後 2 時 30 分
会 場	クロスパルにいがた 4 階 403・404 講座室
出席者	<p>【教育委員】 田中 賢一、小野沢 裕子、市嶋 洋介、渡邊 純子、大宮 一真、五十嵐 悠介、齋藤 昭彦、乙川 千春 計 8 名 * 敬称略</p> <p>【社会教育委員】 岡 昌子、小川 崇、角野 仁美、木村 いほ子、雲尾 周、笹川 博人、出頭 久美子、田中 一昭、田中 宏和、山田 久美子 計 10 名 * 敬称略</p> <p>【事務局】 教育長、教育次長 2 名、地域教育推進課長、中央公民館館長補佐、中央図書館館長補佐、生涯学習センター所長、生涯学習センター所長補佐、生涯学習センター職員 3 名 計 11 名</p>
内 容	<p>1 開会</p> <p>2 開会あいさつ 社会教育委員会議 雲尾議長</p> <p>3 自己紹介</p> <p>4 報告書「社会教育による次世代育成の実践事例と推進方策」について (1) 概要説明 ○社会教育委員会議の雲尾議長が、報告書「社会教育による次世代育成の実践事例と推進方策」の概要について説明を行いました。</p> <p>5 教育委員と社会教育委員との意見交換 ○白根高校の CC 講座は、前年度に生み出されたアイデアを次の年の 1 年生が地域で実践する素晴らしい取り組みだと思ふ。直接話し合いに参加していない人が実践する場合、モチベーションが下がる、あるいは内容が微妙に変わるということがあるのではないかと思ふが、どのように取り組んでいるか。 →工夫として、先輩が出したアイデアの中から自分たちがやりたいものを選び、自己決定を促した。また、アイデア発案に至るまでのインプットが先輩にはなく、アイデアに対する理解が難しいところがあったので、地域の人を呼び、なぜ健康の意識を高めなければいけないのか、どういう地域の状況なのかということについて、先輩と同様のインプットの機会を設けた。 1 年生がやる気を持って楽しそうにやっていたので、1 年生段階ではアイデアを実践するだけでも意味があるという気づきがあった。 ○視覚障がいのある方へ子どもたちが感謝状を書いていたことに驚いたが、音声ボランティアが入ることで、子どもたち自身が録音に加わることができた。子どもたちが国語の教科書の物語を読み、それを地域の人が聞く機会が社会教育の連携の中であつたらよいのではないかと思つた。 中学・高校を中心に若い人材を集め、高校や地域を考える仕組みがあつたらいいと考えている。地域の人たちとのやり取りが密になるといいと思つており、それがコミュニティ・スクールだと思ふ。社会教育と学校の関わりの中で、地域を中心として学びを続けていけるかというのが、報告書を読んでの気づきであつた。 →ワークショップでは、視覚障がい者へのボランティア活動と、社会福祉協議</p>

会の福祉事業との関わりが、コミュニティ・スクールの実践にもつながるのではないかという視点でお話した。早くすらすら読むことが上手な読みだと子どもたちが思い込んでいるようなところがあり、早く読めばいいというものではなく人に伝わるということが一番大事だというお話をさせてもらった。物語を読むことが伝える力の養成につながっていくのではないかと感じた。

○新型コロナウイルス感染症によるさまざまな制限が報告書に書かれているが、一方でポジティブな影響などあったらお聞きしたい。

→保育・幼児教育の実習にあたり、体調管理のような基本的なことが大切だということを学生が気づいてくれたと感じる。他の仕事をされている方も同様だと思う。

また、ネガティブな面も含んでいるかもしれないが、行動や人の人との距離に対して敏感になったのではないか。

→リモート技術が向上し、講義形式はリモートで遜色なくできるという感覚を得ている。日本だけでなく世界の講師からも講演いただけるのではないかと考えている。

→中学校の修学旅行が市内バス旅行になってしまったが、最後の学年を楽しみたいということで、子どもたちは普段発揮できないような力を出して、毎日を楽しんでいた。グラウンドで地域独特の花火大会を行い、地域の方とより深く関わりが持てた。子どもたちは制約された中でも、どうやって楽しむかということについていつも考えていると感じ、それを学校の先生方も精一杯支えてくれていると感じた。

→夜に街へ出ることが全くなり、その時間に本を読むことができた。大切な時間の使い方を新型コロナウイルスが気づかせてくれたと実感している。

教育委員の皆様も、地域にある図書館をぜひ利用いただきたい。

○こんなに長くコロナ禍が続くと思っていたいなかったので、今まで当たり前だと思っていた仕事や普段の生活をもう一回振り返ったり、立ち返ったりして、よりよく生きるにはどうしたらいいのかという考えに至ったとの意見をたくさん聞いており、自身もそう思っている。これはとてもポジティブなことではないかと思っている。

また、オンラインが進んできていることもポジティブな点だと感じており、オンラインを使ってのつながりはできているが、対象が少しピンポイントになってきてはいないかと気になる。

→集まれる人は集まるを基本とし、集まれない人はつながるということにより、むしろ集まりやすく、遠くの人参加しやすくなった。附属学校の研究会なども参加者が全国から来るようになり、その度合いがより高くなってきている。このように、デジタルに接していない人たちからは直接集まってもらい、そこ全国、世界がデジタルでつながるとい形になれるので、今までの少人数で閉塞感のあったところも、画面の向こうと広くつながることができる。社会教育施設という建物の中に集まれる人はしっかり集まり、そこ外をつなぐことを、これから新潟市として整備していただきたいと考えている。

○ワークショップのグループワークでは、多分野間での交流ということでやり方の苦労もあったのではないかと思う。その中でも、活発な話し合いができていたように思った。ワークショップで苦労した点があったら教えていただきたい。

→ワークショップを進めていくうえで、一人一人が違う分野から参加をされているので、多様な考え方と背景を持っていることを自覚して参加した。そこで、まずは何をしている人かということを出し合うという時間を取った。

第 34 期新潟市社会教育委員会議 会議概要

	<p>とにかく否定せず、どんな意見が出てきてもまずは受け止め、そんなことができたらいいいという気持ちで意見を聞くことに気を付けた。</p> <p>6 閉会あいさつ 井崎教育長</p> <p>7 閉会</p>
傍聴者	0名
会議資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員と社会教育委員との懇談会 次第 ・教育委員と社会教育委員との懇談会 出席者名簿